

[研究ノート]

水村美苗 『私小説 from left to right』 試論<sup>(1)</sup>  
—異言語混交文の必然性をめぐって

溝 渕 園 子

**An Essay on Mizumura Minae's "Shisyosetsu from left to right":  
the Necessity of Writing Bilingually**

**Sonoko MIZOBUCHI**

Mizumura Minae's "Shisyosetsu from left to right" written in both Japanese and English, was published in 1992 and because of its novelty, critics were provoked to discuss it in their commentaries. This novel has many subjects and describes clearly several doubts about existing systems, for example, linguistic, modern family, and racial systems of which we are not conscious.

This paper investigates one particular aspect of the necessity of writing in the style of bilingualism, by analyzing the text from the point of constructing Minae's—the narrator and the main character in this novel—identity.

Discussing the existing systems that oppress her and the release from them, we can find author's strategy for expressing the impossibility of revolving to 'true oneself' and the pain from that process. This novel can be considered as the first work by a Japanese describes the resistance to a canon view of a one language in the nation-state.

キーワード 二重言語、制度、違和感、抑圧、家族、人種、言語、主体形成、複数性

はじめに

水村美苗の長編小説『私小説 from left to right』は、1992年より約2年間、雑誌「批評空間」に99回にわたり連載され、1995年に単行本化されている<sup>(2)</sup>。これは、日本企業の海外駐在員の娘としてアメリカのニューヨークに渡った主人公「美苗」が、その地で思春期・成人期を送る中で、日本語や日本文学といったものに極度に執着し懸命に郷愁を探そうとする、いわば〈回帰〉をめぐる物語である。「美苗」を次女とする4人家族、主に「美苗」とその姉

「奈苗」が多民族国家アメリカで暮らすうちに生じた出来事が、「美苗」の回想という形で、終始「美苗」の視点から語られる。

この小説は、発表時、文学者たちを中心に種々の話題を呼んだ。たとえば、タイトルページには、いわくありげに「日本近代文学」という副題が冠せられている。だが、そのテキストは、表題にfrom left to rightとあるように、英語と日本語の異言語混濁文が左から右へ横書きされており、縦書きで右から左に書き進める、もしくは読み進めることが自明視されてきた従来の日本文学の概念を裏切るのである。

そのため、「本邦初のバイリンガル小説<sup>(3)</sup>」と喧伝されたり、一国文学史観としての〈日本近代文学〉という支配的概念そのものに対する挑発との評価を受けたりした。そして、この小説の出現は、1990年代前半当時、日本という国家や日本人、日本語や日本文化の境界領域の自明性を疑うという意味において、こうした既存の制度性を侵犯する、あるいは書き換える〈事件〉と捉えられるようになったのである<sup>(4)</sup>。それは、じきに水村がリービ英雄らと共に〈越境系の作家〉として論じられる契機にもなった<sup>(5)</sup>。

この作品は、主人公「美苗」の回想的な手記として書かれており、表題を黙殺するならば、教養小説としても読まれうる。また、主人公の名前に顕著なように、作者自身の伝記的要素が織り込まれているため、単に回想録、自伝として読むことも可能である。だが、タイトルページの「日本近代文学 私小説 from left to right」の表記は、日本近代文学、私小説、縦書きという制度を否応なしに想起させ、メタ小説として読まれることを求めているように思われる。実際、この小説に関する批評や論文は、そうした方向で書かれている。グローバリゼーション、多言語主義、日本語文学、ディアスポラ、ポストコロニアルといった用語で語るにふさわしい記述をふんだんに持ち合わせているのも事実であり<sup>(6)</sup>、その意味で『私小説 from left to right』はハイブリッドな形式の小説であるといえる。

以上のように、先行研究では、この小説の性格上、日本近代文学という一つの制度に対する抵抗に焦点が当てられている。それをふまえて、本稿では、作者の戦略そのものではなく、主人公「美苗」の行為を分析対象とし、それがどのように作者の戦略に結びついていくのかというプロセスを考察す

る。また、日本語小説として書かれたこの回想的手記は、書き手であり語り手でもある「美苗」にとっていかなる意味を持つのかといえば、それはある種の抵抗や解放として機能していると考えられる。アメリカ社会と英語環境に一種の抑圧を感じ取っていた「美苗」は、日本への帰国と日本語小説を執筆することによって、自己を回復しようと試みているからである。だが、果たしてそれは〈成功〉したのか。これは、書かれた小説が、実際には、横書きの、英語混交文のものになったという点からしても重要な問題を孕んでいると考える。

本稿では、〈違和感〉と〈抑圧〉をキーワードに『私小説 from left to right』のテキストを分析し、主人公美苗が感じ取った諸々の抑圧による違和感がどのように形成されたかを辿る。そして、そこからどのように解放され、それがどういう経緯で抵抗につながっていくのかを論じ、日本語と英語による異言語混交文の小説を書くという行為の必然性を検討する。

## 1. 違和感の様相と仮想される日本

この小説のあらすじを追うと、次のようになる。

19XX年、12月13日金曜日の雪の降る夜、私「美苗」は日記を綴っている。その日の朝、姉「奈苗」からかかってきた電話を思い起こしたのをきっかけに、20年にわたるニューヨークでの生活と、日本で暮らしていた頃の思い出が、「美苗」の脳裏に、様々な感慨を伴いながら次々に蘇ってくる。私「美苗」は、ひたすらに日本を恋い、日本語の本、とりわけ近代文学を読み耽っていた。姉は、アメリカに順応しようと外見を変え、様々な国籍の男性と付き合った挙句に日本人男性と結婚し、日本で彼の親とうまくいかず自殺未遂の果てにアメリカに戻って来た。彼女らには、娘のお稽古ごとや結婚にのみ関心を示す母親と、母娘の言い争いに無関心な父親がいるが、「美苗」が日記を記している現在、一家離散の生活を送っている。父親は老人ホームに、母親は若い男とシンガポールに、彫刻家の姉は生計を立てられないままニューヨークの片隅に、私「美苗」は大学院博士課程の口頭試験を受けずに部屋に閉じこもり煩悶しつつニューヨークの下宿に、それぞれ住んでいる。そして、こうした過去と、日記を書いている現在を行きつ戻りつしながら、「美苗」

の心には行く末への不安が増幅していく。そのような中、以前から日本に戻るべきか戻らざるべきかという問題に直面していた「美苗」は、この回想の中で日本に戻る決意を新たにするが、ここで物語は終わりを告げるのである<sup>(7)</sup>。

そうした間にも、終始「美苗」を捕らえて放さない感覚があった。それは、「私は自分の居るべきではない場所に自分が居り、自分の居るべき場所に自分が居ないという、そのことばかりを思」[58頁] い、「ここは自分のいるべき場所ではない、本当の人生は向こう側にある、いつか向こう側に戻ってそのときこそ本当の人生を始めよう始めようと、…(中略)…ついに本当の意味で日本に戻らずに今まできたのであった」[63頁] というように、「本当の」「自分」の居場所、あるいは在処が、現実にはアメリカに暮らしながらもそこにはないというものである。

では、「美苗」は、それをどこに求めているのか。

そのころからである。今までもどこかでずっと感じていた溝が次第にはっきりと意識されるようになった。

それは私とアメリカとの間の溝ではなかった。…(中略)…それは私と「アメリカの私」との間の溝、あるいは、「日本の私」と「アメリカの私」との間の溝だというべきか、いや、正確には「日本語の中の私」と「英語の中の私」との間の溝だというべきかもしれない。なぜなら私はアメリカに来ることによって「日本の私」を失ってしまったわけではなく、アメリカに来てからも「日本の私」は私が日本語を使う限りにおいてはいきいきと生き続けたからである。そして、「日本語の中の私」こそを真の自分の姿だと考え、日本にさえ帰ればその真の自分を回復できるという思いを抱きながら生きていったのは、「英語の中の私」が私にとってとても自分だとは思えない何ものかだったからである。[192頁]

つまり、違和感を「溝」から生じるものだと考える美苗は、その考えを、日本語を使う自分こそが自分の真の姿とする方向に結びつけていく。英語を使う自分は、アメリカに来て出現した、「自分だとは思えない何ものか」だ

と分析する。そして、「日本の私」が「本当の私」であると認識するようになり、ここから日本への郷愁と憧憬が強度を増す。と同時に、それは「日本人」としての確証の獲得ないし有徴化の欲望へと転じるのである。

だが、ここで「美苗」は、彼女にとっての「日本」とは何なのかという問題に直面する。「美苗」は、ある夏、東京の街で「やっぱり日本人です」と書かれた米のポスターを目にしたことがあったが、その際「私たちのようにカリフォルニア米を食べていても、「やっぱり日本人」なのだろうか」[174頁]というように、「日本人」の定義そのものに問いを投げかける。そして、「まわりに日本人がいなかったわけではない。…だが日本人がいるということ——日本人がいて日本食が食べられ日本語の本があるということ、それらすべてをいくら足し合わせても日本という故郷そのものの代わりにはならぬ」[58頁] と感じる「美苗」は、「日の丸はちまきをしめ日本刀をやアアと振りかざさんばかりの純血主義者となったのは、日本人の血以外のものが流れていないのを、日本人であることの証しにしたかったからであった。じきに私は日本人であることの証しは血にはないのを知り日本語に固執した」[440頁]とあるように、「日本人」としての確証の獲得への欲望を「日本語」に向けるのである。

こうして、彼女は、「日本語の本を読んでいるときだけが、唯一不幸を覚えずにいられる時——あの時代ではすなわち至福の時」[114頁]と感じ、「火が消えたように急に静かになった家の中で、私はひたすら日本語の小説を読み続け」[129頁]る。「精神が日本語の世界に救いを求めており、外界は不要どころか邪魔なだけ」[129頁]と思う「美苗」は、「色町に生息する子供が耳年増になるように、日本近代文学の世界を通しての片寄った知恵を身につけ、欲望を心につちかって」[130頁] いくのである。

そこには詩のような風景と美しい女の人と濃密な人生があった。…(中略)…私のあこがれはつきつめれば形を与えられた世界へのあこがれであり、…(中略)…だが日本を恋いうるあまり私にはそのようなことは分からなかった。形象化された世界と、それに比べれば色あせて見えるよりほかのない現実との間に横たわる溝を、いつのまにか太平洋に

すりかえてしまっていたのであった。そうすることによって、ますます日本を恋うる気持ちを膨らましていったのであった。[131頁]

このように、これこそが「本当の自分」、「本当の人生」だと「美苗」が信じているところの「日本の私」は、現実には日本にいれば、または日本人と接していれば自ずと現われるというものではない。それは、日本語の世界における自分のことであり、日本語によって仮想的に構築されるものであるといえる。「本当の人生」は「日本語」の世界にあり、その世界を与えてくれるのは、彼女がこよなく愛した「日本近代文学全集」であり、「美苗」はその文学的・想像的世界にこそリアリティを感じているのである。

だが、「美苗」の思考は、そこで循環を始める。「私はついに自分がぎりぎりのところまできてしまったのを知った。…（中略）…そしてそのとき初めて私は自分の心の奥底を知ったのである。日本に帰る日がくるのを本当は恐れているのを知ったのである。日本に対する思い入れはもうどうしようもないところで私を形づくっており、…（中略）…日本に対する思い入れが消えるのが恐ろしくなっていた」[64-65頁]という叙述には、意識的に言語で構築された世界の現実へのフィードバックを拒否する、もしくは拒否したいという「美苗」の心理が読みとれる。

以上のように、「美苗」の中で日本は神話化され、〈純粹な〉日本のイメージを満たしてくれる日本近代文学全集に「美苗」は耽溺していく。つまり、「美苗」にとっての日本は近代文学全集の中に保存されており、日本のイメージがこれ以上成長するわけでもなく固定化されたものとなっている。そして、その日本語で構築された世界に自分の身をおき仮想的に体験することで「日本人」であることを確認し、それによってアメリカ生活での居場所のなさから生じる違和感の穴埋めをしていたと考えられる。

## 2. 抑圧的に機能するもの

ここでは、「美苗」にアメリカ社会での生活に居場所のなさを感じさせる大きな要因の一つに抑圧があると考え、それに注目する。一般的に、日本企業の駐在員が家族を連れてアメリカに住むという行為は、家族構成員に対し、

国家・人種・家族・ジェンダーなどの問題において多くの否定のコメントを与えることになる。この小説では、大きく見てそれが家族・言語・人種に係るものとして表れていると考えられる。よって、この三つの問題が、いかに「美苗」に抑圧的に働き、居場所がないという感覚から発する違和感を生じさせているかを検討する。

### (1) 家族の問題——近代的家族システム

「美苗」は、12歳のとき日本企業の駐在員の子供としてアメリカに渡っており、その場合、日本からアメリカへの〈越境〉という行為の単位となっているのは〈家族〉だった。そして、この越境行為は、本人の意志によるものではなかった。そのことは、「もちろん両親はアメリカに移住するつもりだったわけではなかった」ため、「私たちは移民ではなかった。父も母も私たち一家全員がいつの日かは日本に帰るであろうことになんの疑いももたなかったし、それが何年先であろうと、そのとき二人の娘がまだ日本人であろうことになんの疑いももたなかった」[55頁] 上、「両親は私が一人でアメリカを去るだろうとは想像もしていなかったし、私自身も日本に戻るといえば家族で戻る図しか思い浮かばず、一人でアメリカを去る決心はつかなかった」[64頁] という「美苗」の回想からも明白である。つまり、日本を家族で出国してきた「美苗」の思考は、日本に帰国する場合も家族という制度的単位に絡めとられていたといえる。そして、一時的越境という当初の目論見は、長い年月を経てもなお、「美苗」の中で、家族と共に残存している。

さらに、そこにジェンダーの視点が重ねられる。「あんたたちが娘でよかった、日本の大学をでなくていいから、と母はよく言っていた。娘はいくら外国で育てられるといっても、日本の男——日本の社会に受け入れられるよう育てなければならなかった」両親は、「日本に帰る日を先送りしていて平気な分、日本の社会の規範に丁寧につきあうだけの根気がなかった。娘の未来の夫には当然のように日本の男を想定していたくせに、娘がいつとはなしに日本の規範から逸脱していくのに、良くいえば寛容、悪くいえば鈍感だったのである」[142-144頁]。すなわち、自分たちの帰国が日本人男性との結婚によって果たされるということを自明のものとして担わされていた「美苗」

たち姉妹は、近代的な家族システムに思考を抑圧され、帰国の自己意志を抑圧したまま、その機会を逸してしまっているのである。

両親が二人を日本に帰国させることに明確なプランを持たず、そしてアメリカに移住するという意志を持たなかったために、結果的に「美苗」たちはアメリカに住み続けることになってしまった。そして、「“Twenty years since our—” “Our exile”? No. That sounds too ordinary. How about “the Exile”? No... “The Exodus”? Oh yes, “the Exodus”! Yes, let the word be “Exodus.” “Twenty years since the Exodus.”」[5頁]と煩悶しながら、帰国のきっかけをつかめぬ「美苗」は、大学院を修了するための口述試験を延期し続ける。その意味で、‘our’ と記される家族の存在は、明示化されなくとも「美苗」に単独での日本への帰国という主体的な行動を許さない要因となっている。つまり、家族という一つの近代的な社会制度は、「美苗」にとり、意思決定の先延ばしという形で抑圧的に機能しているといえ、このことが「本当の」「自分」がここにはいないという違和感の増幅に結びついていると考えられる。

## (2) 人種の問題——コロニアルなまなざし

「美苗」にとって、「英語の中の私」は「本当の」「自分」ではない。だが、アメリカでは、英語が出来なければ相手にされず、東洋人や colored として、自分が一緒にカテゴライズされたくないような人々と一緒に扱われる、と「美苗」は語る。すなわち、日本人であるというアイデンティティはアメリカで英語を話している限り能動的行為として發揮できずその意味を剥奪されると考えられる。中国人や韓国人、日本人といった差異は、〈東洋人と西洋人〉という単純な二項対立に回収される。さらに、「白人」ではないが故に、colored として、「黒人」と一緒に「負の価値を与えられ」[223頁] つつ重層的に囲い込まれていく。

「美苗」は、「日本人が他人から見て中国人や韓国人と見分けがつかぬというのは、目で見て納得できる」と譲歩しつつも、「だが日本人が黒人と同じように“colored”だというのは、女と月が同じように陰の世界に属するといった類いの、観念の世界でのことがらであり、物理的世界からそのまま推論できることではない。それは近代に入ってから西洋人が西洋言語の主体で



ある自分たちを white とし、彼らにとって異質に見える人間をすべて colored と呼ぶことによって機能するようになった概念でしかなかった」[223頁]とし、「西洋人」による暴力的な概念規定が、アメリカ社会において自分に抑圧的に機能していることを自覚する。そして、「そのようなこと [本稿執筆者注：アメリカ人からすれば、日本人が中国人や韓国人と一緒にたにされるのに驚きを感じることに自体に驚きを感じるであろうということ] を理解していくのに」「抵抗を覚えざるを得なかった」[247頁]「美苗」は、それを否定的に受けとめる。このことは、次のくだりからも明白である。

自分が東洋人であることを知る驚きとは、それは西洋人から、あなたは向こう側の人間です、と私から見ても向こう側の人間と一緒にたにされてしまう驚きであった。しかも、私自身彼らではないことを幸せの一つとひそかに数えている人間と一緒にたにされてしまうことに対する驚き——そして屈辱であった。[215頁]

ここには、「東洋人」を一絡げに「向こう側の人間」として措定する白系アメリカ人のコロニアルまなざしばかりではなく、他の「東洋人」を「彼ら」の一語で括り、「彼ら」に対し優越感をひそかに持つ「美苗」自身の内面化されたコロニアルまなざしもまた浮かび上がるよう仕掛けられている。つまり、「美苗」にとって「日本人」であることは、「白人」に対しては、差異が捨象され「負の価値を与えられ」という点で、否定的かつ抑圧的な契機であるが、日本人以外の「東洋人」、colored に対しては、逆に暴力的な契機となり得るというように、表裏一体のものとして描かれていると解釈できる。この点において、「美苗」のアメリカでの「日本人」としての生きにくさが重層的に物語られている。

さらに、それは、「奈苗は今まで「白人」というような言葉を使うことはなかった。思えば私自身英語では white と大した抵抗もなく使っていたその言葉を、日本語で、しかも奈苗を前には使うことはなかったのである。それがあの日、二人の間には、白人白人白人と何か見えない禁が解かれたかのようになり白人という言葉が出てきた。それは逆に私たち姉妹が今までその言葉を

さけて通ってきたのをあらためて気づかせたのもあった」[292-293頁] というように、「白人」という日本語と、そこに潜む制度化された暴力性への意識的な忌避が、彼女らの行為を「向こう側の人間」にさせられないような方向へと決定づけていたこと、またそれがアメリカでの主体的な行動を実は制限するものとして機能していたことを自認する。

そして、「日本人も韓国人もないというアメリカの現実には母にとってはアメリカという異国の現実でしかなかったが、奈苗と私にとっては、そこで自分の居場所をみつけねばならない現実そのもの」[211頁]であり、こうした否定的かつ抑圧的な契機の前に、自らの主体的な行動に限界を感じる時、そこに自分の「居場所」はやはりないと諦め違和感を覚えつつ、ただ佇んでしまうのである。

### (3) 言語の問題——英語ヘゲモニー

英語は普遍的なものではなく、特権的であるのみという思いに至るとき、「美苗」は、他の諸言語を支配する言語としての英語の強権性に対し強い抵抗感を覚える。

あの並列した万国旗が国の間の力関係を隠蔽するのと同様、さまざまな言語が世の並列していると思うのは言語の間の力関係を隠蔽するものでしかない。…(中略)…私たちがそれぞれ英語と日本語で書こうとしているかぎり、作家としては同じ力をもちえない。英語で書くと言うことは、世界中の言語に翻訳されるということであり、それ以前に、そのまま世界中の人に読まれるということなのである。[370頁]

世界の様々な言語は、政治的権力と緊密に結びついており、その意味において、すべてに対等な地位が与えられているわけではなく、現実には階層化している。英語に堪能であることこそが、多民族国家であるアメリカ社会にあっても自分の階層を決定するという現実を、「美苗」は小学生当時から体験的に学んでいた。だが、こうした英語の優位性は、アメリカ国内にとどまらず、世界においても特権的なものとして機能していることを自覚する。こ

のような言語の力関係が、アメリカ社会での「美苗」の行動を「日本語の中の私」こそが「真の自分の姿」と思いながらも、常に英語を優先するという方向へと決定づけてきたと考えられる。

そうした言語と主体形成の密接な関係については、次の叙述に明示されている。

そこにあったのはたんなる愛国心ではない。そこには、毎朝星条旗に忠誠を誓わされアメリカに同化をうながされながら、東洋人である私には同化が可能ではないと言う思いがあった。そしてそれは、英語ヲ勉強シテイルベキデショウといわれても、東洋人である私は英語を正統的に継承することができないという思いと同じであった。[365頁]

このように、英語と日本語という使用言語の複数性は、そのまま主人公「美苗」の主体の複数性に折り重なる。日本語ではなく英語ができなければ相手にされないにもかかわらず、英語が堪能であってもそれを「正統的に継承することができない」という思いは、自分が「アメリカに同化」できない「東洋人」であるためだと、言語の問題が人種や主体形成の問題へと還元されていく。アメリカ社会において、日本語と英語の関係は、東洋人と西洋人の関係、有色人種と白色人種の関係と不可分である。また、世界において、英語を母語とするアメリカ人の国家は、強い権力を有している。そのような中で、「美苗」は、アメリカで英語を話す自分に違和感を覚えつつも、それを手放すことができず、複数の主体を抱えたまま、問題解決に向けた決断を下せない。こうして、社会的にも個人的にも抑圧的に機能すると「美苗」が自覚する英語は、「美苗」の主体を絶えず揺らがせつづけるのである。

### 3. 抑圧からの解放の契機

近代的家族システムや人種と言語の問題が、「美苗」に抑圧的に機能しその意思決定を繰り延べてきたことは、先述したとおりである。だが、最終的に「美苗」は、日本に帰り日本語で小説を書くという決心に至る。本論では、この意思決定を、ひとまず抑圧からの解放への志向と見なす。ここでは、先

述した「美苗」にとって抑圧的に機能するものから、どのように解放の契機が生じるのかを論じる。それは、概括すれば、自身を取り巻く環境の変化によって偶発的に与えられたものと、それに触発されて自発的に呼び起こしたものの二つに分けて考えることができる。以下、前章で述べた内容に対応させ、三つの観点から考察する。

### (1) 家族システムの崩壊と帰国の決意

家族一緒に日本に帰るといふ思考の呪縛から「美苗」が解放されるのは、それまで越境行為の単位となっていた家族と移動性の関係が、数年のうちに、そのときまで固定されていた典型的な構図から大きく逸脱していったからである。

あれから母娘ともに「まともな結婚」を諦めるまでの十年近い歳月は、涙とののしり声とため息に費やされた歳月であった。…(中略)…そのあと母は憑きものが落ちたように奈苗の色恋沙汰に興味を示さなくなったのであった。…(中略)…実際、母が奈苗の色恋沙汰に無関心になると、母自身の色恋沙汰が始まったのは時を一にしていた。…(中略)…父はこういうこと全ての外側に居た。…(中略)…奈苗の結婚に見切りをつけた母は、次はそんな父を見捨ててしまったのである。呆然とした私たち姉妹はしばらくは何が起こったのか理解できなかった。父の長期にわたる入院を機会に母が下した決断であった。父を病院から老人施設に移している間に Long Island の家は手際よく売りに出され、買い手がつくと同時に母は慌ただしく私たちの前から姿を消していった。[152-156頁]

このように、家族をめぐる状況は短期間に大きな変化を遂げている。まず、日本人男性との「まともな結婚」を夢見る母親と、その期待を懸命に実現しようとする姉「奈苗」との間に、愛憎関係ともいえる大きな確執があり、お互いにそれを諦めて自分の思い通りの行動をとるようになった。また、姉は様々な男性と関係を持ち日本を敵国と思ひ帰国の意思をもたず、一方母はニュー

ヨークで仕事を始め年下の男性と恋仲になりシンガポールで暮らしその男性とともにすでに日本に帰る予定になっている。さらに、アメリカに永住する意志のなかった父親が、ニューヨークの老人施設でひとり淋しく年老いていく運命にある。

ここから明白なのは、それまで国家間の移動の意志決定を下していたのが父親つまり男性であり、それに従うのが女性であった父権の家族関係、さらにいえば男性が越境を担うのに対し、女性はその与えられた場所で定住するという従来との関係がなしくずし的に崩壊しているということである。

こうして、直接的には家族の離散によって、一家挙げての日本帰国の夢はまったく非現実的なものとなり、それはまた「美苗」の中でアメリカに住み続ける積極的な理由が減衰することにもなった。これまでの家族関係がそれとして機能しなくなった時点で、「美苗」にとって日本に帰るという越境行為が家族単位から個人の問題へと転換を迫られたと考えられる。それは、すなわち、それまで「美苗」という主体の形成において抑圧的に機能していた近代的家族システムからの、偶発的に与えられた解放の契機を意味しているといえよう。

## (2) 日本語での小説執筆宣言と英語環境の抑圧からの解放

「美苗」にとって、日本への帰国後何をするかという問題と博士課程修了後何をするのかという問題は同根のものだった。「美苗」は、電話で姉「奈苗」に日本語で小説を書きたいということ、そして博士論文の執筆を延期する予定であることを宣言する。先述した特権の言語としての英語からの抑圧、アメリカでの「自分」の「居場所」のなさから生じる違和感を解消する方途を、「美苗」は自分の意志で選択するのである。

そして、それはただ単に英語環境の抑圧から逃れたいという逃避願望を意味するだけではなく、同時に「本当の自分」の「居場所」への回帰をも志向していると考えられる。英語環境の抑圧と「本当の自分」を見失うこと、いわば半母語的言語による抑圧と主体の喪失は、密接に結びついているといえる。だからこそ、フランス文学を研究する美苗が、フランスに渡ることを意図せず、日本に帰り、日本語環境に身をおくことにより、母語で主体を回復

する決意をしていると考えられる。

口頭試問を受ける決心をした「美苗」は、「ふるさとは帰るところにあらず」という言葉を反芻しながらも、日本で日本語を用いた小説を書くつもりだと教授の一人に電話で伝える。教授には、日本で教育を受けてこなかった「美苗」にうまい日本語が書けるのか、と大笑いされるが、「美苗」は文学作品を読んできたから大丈夫です、漱石のように書きたいと答える。

—Well, whatever you do, try not to mix up your Japanese with English.

—I'll try not to.

そう応えながら、ふいに私はこの期に及んで私を悩まし始めた疑問を口に出したい欲求に捉えられた。私は言った。カリフォルニアの日系人のようにアメリカに根をおろし、英語で物書きになろうとしていた人生の方がよかったのではないだろうか。

彼の反応は速かった。

—Nonsense!

断固とした口調で言った。うって変わった真面目な声であった。

—You won't be what you are now.

そうしたら、私が私でなくなってしまう。[382頁]

この日本語のみで小説を書くという行為が、「美苗」がこの時点で尊ぶ「言語の本質にある、他の言語に還元できない固有性を慈し」む行為なのか、それとも「言語の翻訳可能性を容易に否定」する行為なのか<sup>(8)</sup>。そしてまた、「私が私でなくなってしまう」わないようにするための最良の表現方法たりえるのか。言葉が「世界を創る」と信じるがゆえに、「美苗」は日本語や日本近代文学を通じて「本当の人生」を思い描くことができた。だが、この「本当の人生」を書く言葉は、まるごと日本語、とりわけ「正しく美しい文学的」な「日本語」に書き換えてしまっているのだろうか。「本当の自分が思い描ける場所」＝「本当の自分」の「居場所」なのか。おそらくそうではないだろうという答えを暗示しながら、その循環不可能性を引き受ける覚悟のもと「美苗」は、初めて自分の意思で日本語による主体回復という自ら進むべき

道を選択し、物語はここで大きな転換点に達していると考えられる。

### (3) 抵抗としての二重言語小説と「本当の私」の在処

こうして、「美苗」はいったん小説言語として日本語を選びとるものの、そのことにより、実際には、英語の抑圧から解放されるどころか、いっそう苦悩が切実なものになるという皮肉に直面する。国家と民族と言語が密接に絡み合う地点で試みられる「美苗」のアイデンティティの獲得が、今度は新たな違和感を生み出すことになるからである。

あれ〔本稿執筆者注：制服を着たおじさん〕はアメリカにいる日本人ではなく、日本にいる日本人、日本で働き、日本食を食べ、日本語を話すのが当たり前日本人、自分が日本人だろうという意識すら持っていないであろう日本人——そういう日本人を実に八年ぶりに目の前にしたのだった。私は下をむいて手荷物の整理をする振りをよそおいながら、通路の乗客の列が前へ前へと進む中、声を出さずに泣いた。〔59頁〕

すなわち、一時帰国の際に覚えた違和感の元を辿れば、自分には「日本」に住み、「日本語」を話し、「日本国籍」を持つ人々には生じ得ない問題があるということが浮き彫りになってくるのである。「日本」に住み、「日本語」を話し、「日本国籍」を持つ人々にとって、「日本語」の運用能力が高度であるかどうかは、自分の日本人というアイデンティティには無関係であり、「日本語」で自己表現をすることは自明のことであり、そうした問題が日々意識に上ることもないという事実が明確に違和感として意識されたとき、「美苗」の「日本」への同化の幻想も、「日本語」の「正統」な「継承」の願望も、「だが私には彼女のように自然に戻っていけるふるさとはなかった。…(中略) …ふるさとは戻るべき場所に非ず」〔379頁〕という言葉に収束されるがごとく崩壊するのである。

そして、「私の日本に対する渴望は、一人でひたすら日本を思ううちに、どのような現実によっても癒されないもの、どのような現実に対しても過剰なものになってしまつて」〔62頁〕いることが「日本を恋いうるあまり」見

抜けず、「形象化された世界と、それに比べれば色あせて見えるよりほかのない現実との間に横たわる溝を、いつのまにか太平洋にすりかえ」ることによって、「ますます日本を恋うる気持ちを膨らましていった」[131頁]という、手記執筆時点での「美苗」の述懐から、国境を越えて帰るという移動だけでは故郷の夢が満たされないことも明瞭に示されている。

こうして、日本語や日本近代文学を通じて「本当の自分」を思い描くことができるかと信じた「美苗」は、「日本国籍」を持ち「日本語」を話せる「日本人」であり「日本」に住んで「日本文学」として「私小説」を書く時、「日本語」のみでは欠落してしまう自分の「世界」、日本語のみでは表現しきれない自分の「世界」から目を背けることができない。英語から受ける抑圧は、日本語を選択することによって一瞬解消されるように感じるが、結局それは主体を回復させることにはならず、新たな問題を抱えこむひきがねにすぎないことが暗示されている。よって、違和感は解消されず、「自分が居るべき場所」と美苗が信じてきた場所への〈回帰〉は果たされなかった、あるいは究極的には不可能であると解釈できよう。そして、〈回帰〉する場所を失い宙吊りにされた「美苗」の前に、「英語の中の私」と「日本語の中の私」といった、言語別に恣意的に文節化され安定した「世界」を食い破るようにして、このような小説言語としての異言語混交文が必然的に要請されたと考えられる。

#### おわりに

以上、『私小説 from left to right』を、〈違和感〉と〈抑圧〉というキーワードを用いながら、家族、人種、言語の三つの面から分析し、日本語と英語の二重言語小説を書くという行為の必然性を辿ってきた。「美苗」にとって抑圧的に機能したこのような制度がいったんは解消しつつも、そのこと自体が「美苗」の違和感の消失に結びついてはいかず、捻れるようにして本来の目論見をそれていくことが分かった。

このように考える場合、こうした異言語混交文で横書きされたテキストは、「美苗」の違和感の表出であり、「英語の中の私」と「日本語の中の私」という差異を保存するための積極的方法でもあり、結果的に既存の社会システム



への抵抗になったと見なしうる。ここで述べた既存の社会システムというのは、狭義には、たとえば「英語」と「日本語」、「アメリカ文化」と「日本文化」といった完結した体系を前提とした制度性のことを指す。「美苗」は、そうした対立構図の中で分裂しているわけではない。二つの言語共同体、「英語の中の私」と「日本語の中の私」を二項対立的に並べて、そのどちらにも「本当の私」はいないといった論理的整合性を主張することを選択してはいない。二つのアイデンティティを右と左において自分はそのどちらでもないと言うのは、裸の自分、つまり「本当の私」というものがそこではないどこかに帰属していると考えることになるが、この小説の異言語混交文はそれを意味しないと考える。むしろ、「英語」や「日本語」、「アメリカ文化」や「日本文化」が複線的に混在している「美苗」自身の体系が、何らかの刺激を受けるたびに分裂し、そこから生ずる痛みをこの異言語混交文によって縁取ろうとしていると理解される。

「美苗」の「本当の自分」への〈回帰〉が遂行できないことは、終点や解決のある安定したアイデンティティを疑う契機になりうる。そして、アイデンティティは一箇所に帰属するスタティックなものである、つまり「本当の私」はそこにいるはずであり、そこに在るべきであり、それを求めなければならないというような内面化された国民国家の規範への抵抗を主題として、「日本人」によって必然的かつ戦略的に異言語混交文で書かれた最初の作品であると、この小説の一つの意味を結論づけることができよう。

#### 注

(1) 本稿は、2000年度日本近代文学会九州支部秋季大会（2000年11月25日、於熊本大学）において、「水村美苗『私小説 from left to right』論—発話の抑圧のメカニズム」と題し口頭発表した内容を再考したものである。

(2) 本文は、新潮文庫版（1998年刊）を用いることとする。これは、単行本（1992年刊）のテキストにさらに加筆・修正が施されており、現時点での決定稿と見なされている。なお、本文からの引用は、引用文直後の〔 〕にその頁を示している。

(3) 新潮文庫版カバーを参照。

(4) たとえば、小森陽一は「そのときどきの美苗の認識のレベルの差異を、それぞれ提示しようとする『私小説—from left to right』の文体は、同時に、〈四位一体〉〔本稿執筆注：「日本」—「日本人」—「日本語」—「日本文化」〕の結合を自明なものとしている、日本の読者に対する挑発であり挑戦でもあるのだ。と言うのも、英語で書かれている箇所は、なぜ「日本語」に翻訳できな

いのか、という問いを発しながらこの小説を読むことをとおして、読者は自らの意識を、一旦は「日本語」というシステムの外へ離脱させることが可能になるからだ。…（中略）…同時に、水村美苗の英語日本語交じり文は、新たな小説の「日本語」の創造である。あらかじめ安定した、正しく美しい文学的「日本語」が存在しているわけではない。優れた小説とは、常に一回的に、新たな言語システムを生み出していく実践にほかならないことを、水村は身をもって示しているのだ」と、日本語の制度性を創造的に破壊しようとする作者の行為に着目し論じている。（『〈ゆらぎ〉の日本文学』、1995年、日本放送出版教会、308-309頁）

(5) 青柳悦子の論では、水村は、『星条旗の聞こえない部屋』の作者リービ英雄とともに、「自己形成の過程で移動が生じたために複数性を抱えることになった」「越境地帯の子供たち」、つまり「「移植型」の境界児童」と同定されている。このように主人公が異国で自己形成を行うという点に注目し、水村やリービを同じカテゴリーに入れる傾向は、他の論者にも見られる。（土田知則・青柳悦子『文学理論のプラクティス—物語・アイデンティティ・越境』、2001年、新曜社、251-252頁）

(6) これについては、吉原万里が「この作品で水村は、私小説という近代日本文学の伝統的ジャンルを現代アメリカという設定に使うことで、文学・近代・日本・西洋といったテーマを斬新にとらえ直している。…（中略）…国境がより浸透性をもちつつある世界秩序のなかで、アイデンティティと言語や文学の関係がどのように再編成されるかを描いている。…（中略）…作者が媒体としている言語自体、特に自己表現・自己回復の手段としての日本語・日本文学を中心的なテーマにしている点が特徴的である。…（中略）…『私小説』は回帰の物語であると同時に、失ってしまった、あるいは初めから存在しなかった「故郷」を渴望する物語である。…（中略）…『私小説』の旅路はそうしたカテゴリー〔本稿執筆注：人種や国家・家族といったカテゴリー〕の持続的な重みを認識していく経路である」と、この小説が投げかける既存のシステムへの疑義を主人公の主体の形成と関連づけつつ述べている。（吉原万里「Home is Where the Tongue is: リービ英雄と水村美苗の越境と言語」、『アメリカ研究』34号、2000年3月、57-58頁）

(7) テキストでは、この回想が日本への帰国後に綴られていることは明示されていないが、「美苗」が日本に帰国することを決意し、姉「奈苗」が「美苗」の決意を受け入れるところで回想は閉じられているため、この手記は日本に帰国した後に書かれたと考えるとよいだろう。また、大学院博士課程の口頭試問後に帰国する意思や、口頭試問後は英語による博士論文ではなく日本語で小説を書きたいとの「美苗」の希望が記されており、この回想的手記が当初は日本語小説として書かれたことが暗示されている。

(8) 本文は、次のように続けられている。「私は期待通りに慰められた。彼だからそう言ってくれるのがわかっていて聞いたのである。日本語の世界も英語の世界もよく知っている彼は、言葉が人間を創ってしまうことを知っていた——というより、言葉そのものが世界を創ってしまうのを知っていた。翻訳者として名高い彼は言語の翻訳可能性を容易に否定するようなところにはいなかった。翻訳の可能性の限界を地道に掘り起こし進んでいるからこそ、言語の本質にある、他の言語に還元できない固有性を慈しんでいるのにちがいない。」[382頁]